校長研修だより２１０

善きサマリア人

2025・8・22　重枝 一郎

「インクルーシブ教育」というと，特別新教育の拡充と合理的配慮の義務化といった流れが注目される。「合理的配慮」という言葉は，元々アメリカで宗教差別の文脈から出てきた言葉と言われる。そういう意味で本当に小さい存在に寄り添っていく，様々な苦悩を抱えた人に寄り添っていくことが「インクルーシブ」という概念になる。

「インクルーシブ」は包摂性と訳され，何か包み込むイメージがある。それはそうなのだが，インクルージョンつまり「社会の在り方が変わる」の感じもいいと思う。また，「合理的配慮」は「リーズナブル・アコモデーション」という言葉の訳である。シンプルな訳の方がわかりやすい。「お金のかからない調整」。学校で保護者から合理的配慮を求められた際は，「お金のかからない調整」で対応するからである。

「インクルーシブ」という掛け声があって，社会の制度も変わり，合理的配慮も義務化されたわけだが，それで「インクルーシブ」に「なった」とは言えない。私たちが「インクルーシブ」に「なって」いかなければならないのである。私たちが「なっていく」ということは，私たちの関係性のあり方や態度が「変わっていく」ということである。それは，**「ケアの視点に立つ」**ということである。

「ケアの視点に立つ」とは，理想とか正しさ，正義のようなものの側に立って，そこに何かを引き寄せていくことではない。むしろ目の前で苦しんでいる一人の人，その人の苦しみに寄り添い，そして自分が一歩踏み出していくという態度，その始まりが「ケアの視点に立つ」ということである。

「ケア」について一番わかりやすく示しているのが聖書の**「善きサマリア人」**のたとえ話である。とてもインクルーシブなたとえだと思う。サマリア人が，その人を発見し，憐れに思い，近寄る。つまり，認知，感情，行為というプロセスが「ケア」の**「かかわり」**の特徴として大事なのである。「ケア」は結果ではなくプロセスである。

「ケア CARE」と似た言葉で「キュア CURE」がある。「キュア」は治療・矯正・救済のことで，一方向的，専門的，非日常な「かかわり」になる。一方「ケア」は双方向的，非専門的，日常的な「かかわり」になる。つまり「ケア」は一方的に与えるのではなく，対話を通じて相手と「つながる」ことになる。

キリスト教主義の学校として，この「ケア」は重要だと思う。「ケア」する過程で，当事者自身も自分の力で何かに気付くことができたり，そのかかわり自体が豊かなものになったりする。そして，いろんな人がいろんな考えを出し，その共同体自身が豊かになっていく学校のことだと思う。

人は一人では生きていけない弱い存在である。その弱い一人一人がつながることが大事である。哲学者パスカルの**「人間は考える葦」**という言葉を聞いたことがあると思う。生徒に「考える葦」とはどういう意味かと問うと，「人間は考える存在である」と答える。そして「葦の意味は？」となる（笑）。葦は自然の中で弱さや儚さの象徴にたとえられる。パスカルは「人間は弱いものだということを考えられる存在，これが人間。弱さの自覚から，人間はつながって生きるもの」と言っている。葦は水辺に群生している。１本では弱いけれど，つながって固まっているので，風を受けて傾いても，またしなやかに戻ってくるというレジリエンスをもっている。私は，そんな女学院でありたいと思う。

一人一人に寄り添うキリスト教主義学校として，２学期もチャーミングにがんばろう